

〈論文〉

唐澤富太郎の『教師の歴史』(1955)から 『教育博物館』(1977)への質的転換 —筆跡による教育者の人間像の探究—

土井 進

要約

唐澤富太郎(1911-2004)の教育学研究は専ら書物一筋であり、『教師の歴史—教師の生活と倫理—』(昭和30年)においても、従来の研究が教育制度や教育政策面を中心に記述されたのに対し、唐澤は専ら回想録、自叙伝、文学作品、地方教育史、学校沿革史等の文献資料によって教師の生活と倫理を明らかにしたところに特質がある。

一方、63歳(1974)で東京教育大学を定年退職した唐澤は、定年は「解放された自我への出で立ち」であるとして、30年余りの歳月をかけて収集した実物資料を駆使して、畢生の大業『教育博物館』(昭和52年)(上中下解説)に着手した。唐澤は、中巻『日本の学校文化』と下巻『日本の生活文化』において、教育者の「書」や「書簡」の実物を研究資料として取り上げ、文献研究から実物研究へと研究方法の質的転換を図った。

すなわち、教育者の筆跡に直に触れることのできる「書」や「書簡」を通して、人間像の把握に迫ろうとしたのである。唐澤が福沢諭吉、森有礼、嘉納治五郎、貝原益軒、跡見花蹊、そして、西田幾多郎の「書」と対峙することによって、一体どのような人物像や教育精神を汲みとったのであろうか。唐澤は、『教師の歴史』(1955)の精緻な文献研究の基盤の上に、定年後に質的転換を遂げた実物研究の方法によって『教育博物館』(1977)を完成させたことについて考察した。

キーワード

唐澤富太郎 『教師の歴史』 『教育博物館』 文献研究 実物研究

1. 研究の目的と方法

『教育博物館』(1977(昭和52)年)は、唐澤富太郎の教育学研究の総決算であり、頂点に位置している、と筆者は捉えている。ここに至るまでの教育学研究の歩みを、筆者は次の6段階として捉えている。

- (1) 幼少期の生活体験と教育学への志
- (2) ドイツ教育哲学の研究(ナトルプ)、
- (3) 仏教教育思想の研究(親鸞・道元・日蓮、法華経)、

どい すすむ: 淑徳大学 人文学部 教授

- (4) 日本教育史の研究(教師の歴史、学生の歴史、教科書の歴史、日本教育史、近代日本教育史)
 - (5) 世界の教科書研究(世界の道德教育、教科書と国際理解、世界の理想的人間像)
 - (6) 図説日本教育史研究(図説近代百年の教育、図説明治百年の児童史、教育博物館、図説教育人物事典)
- 『教育博物館』には、これらの研究成果が総動員されており、唐澤富太郎の教育学研究の結晶であると考えられる。

『教師の歴史—教師の生活と倫理—』(1955(昭和30)年)は、唐澤が43歳のとき、奈良女子高等師範学校から母校の東京教育大学に移り、仏教教育思想の研究に一段落をつけ、日本教育史講座の担当教員として取り組んだ最初の仕事であった。東京教育大学には唐澤の先輩にあたる梅根悟教授が既に外国教育史講座を開設されていたので、唐澤は日本教育史講座を開設することになった。それにともない初めて「日本教育史」と「教育原理」の授業を担当することになった。奈良女高師における唐澤の担当授業科目は、「教育学」であり、もっぱら仏教教育思想を中心とした教育原理を講義していた。したがって「日本教育史」を担当することは初めてであり、授業準備が大変であった。

唐澤は「日本教育史」の通史を構想するにあたって、教師にとっての最大の仕事である「授業」を構成する3要素である、教師・児童生徒・教材に着目した。そしてこの3要素の観点から唐澤は、『教師の歴史』、『学生の歴史』、そして『教科書の歴史』を近代日本教育史研究の3部作としてまとめることを企画した。

その後、51歳で『世界の理想的人間像』を著したのを最後に、唐澤の教育学研究の方法は、文献研究から実物研究へと質的転換が図られた。この研究方法の転換によって、唐澤の教師教育学研究の内容にどのような変化と深まりがみられたのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

研究方法は、文献研究による『教師の歴史』において、唐澤が明らかにした研究成果はどのようなものであったかを要約する。次に実物研究による『教育博物館』において、中巻『日本の学校文化』の「近世の学問と思想」、「近代日本の教育家たち—その筆跡にみる人間像の一側面—」、ならびに下巻『日本の生活文化』における「書く—その哲学と美学」において、唐澤が取り上げた教育者、学者、教育行政家、女性教育家の中から、福沢諭吉、森有礼、嘉納治五郎、貝原益軒、跡見花蹊、そして西田幾多郎を事例として取り上げ、唐澤がこれらの教育者等の「書」に対峙し、それを解説する労作業の中から、どのような人間像を汲みとり、どのような教育精神を看取したか、を明らかにする。

2. 唐澤富太郎の教育学研究の根本精神と文献研究から実物研究への質的転換

唐澤富太郎は、大学紛争のため昭和44年度の入試が中止になり、翌年の昭和45年度の入学生に次のような講演を行った。

- 2
- ① 研究には飛躍があってはいけない。すなわち、研究は内からの積み重ねでなければならない。研究というものはいかなる場合にも自己の内的脱皮でない限り真の深まりはない。流行のみを追っていたのでは、ものにならないんだということを繰り返したい。
 - ② 自分の学説が変わるときには、自分なりに相当苦しむのでなければ研究者とはいえない。変わるにしても苦しみ、自己の内から脱皮し、いわば過去を否定的に媒介してのみ正しい発展が考えられる。
 - ③ 流行だけを追っていたのでは何一つものにならない。この点、学問研究には“執念”こそが必要であることを強調したい。⁽¹⁾

学生に語り掛けたこの言葉は、そのまま唐澤が体験し、乗り越えてきた経験に基づく信念であった。特に文献研究から実物研究への転換時の唐澤の苦悩は並大抵ではなかった。

3. 唐澤富太郎の昭和40年代における文献研究から実物研究への転換

下の表1。「唐澤富太郎の研究方法的質的転換」は、唐澤が専ら文献一筋の研究手法から、一転して昭和40年代(1965)から「遊び・学び・暮らし」において実際に使用された実物を猛烈な勢いで全国各地を行脚して収集し、日本人の形成史を実証的に明らかにしようとした実物研究に大転換していることを示したものである。この表1. は唐澤富太郎(1975)『教育的真実の探究——研究者の自伝的回想——』ぎょうせい、をもとに作成したもので、土井進(2020)「唐澤富太郎の文献研究による『教科書の歴史』から実物研究による『教育博物館』への内的脱皮」淑徳大学総合福祉研究所『総合福祉研究』No.24から引用した。

この表から分かることは、51歳までが文献研究の時代であり、その後欧米16か国の教育視察から帰国してからは、一転して実物研究一筋に代っている。そして、文献研究と実物研究の成果を総動員し、唐澤の教育学研究の結晶となったのが『教育博物館』である。

表1. 唐澤富太郎の研究方法的質的転換

西暦(昭和)	年齢	教育の実物資料展示会	主な研究業績	研究方法
1942 (17)	30		『親鸞の人間観・教育観』	文献資料中心の研究
1949 (24)	37		『ナトルプの社会教育学』	
1954 (29)	42		『中世初期仏教教育思想の研究』(学位論文)	
1955 (30)	43		『教師の歴史』『学生の歴史』	
1956 (31)	44		『教科書の歴史』	
1961 (36)	49		『世界の道徳教育』『教科書と国際理解』	
1962 (37)	50		・第3回ユネスコ教科書会議で3時間講演 ・欧米16か国を半年かけて教育視察	
1963 (38)	51		『世界の理想的人間像』	
1966 (41)	54	・名鉄デパート	『図説近代百年の教育』	実物資料中心の研究
1967 (42)	55	・新宿小田急百貨店 ・島根県一畑パーク		
1968 (43)	56	(明治百年)	『図説明治百年の児童史』上下 ・鉄筋3階建ての「教育博物館」を建設	
1972 (47)	60	(教育百年) ・大阪三越百貨店 ・町田市大丸デパート ・番町小学校 ・日本橋三越		
1974 (49)	62	・八王子市郷土資料館 ・新潟大和デパート ・銀座松屋		
1977 (52)	65		『教育博物館』上巻「日本の児童文化」 『教育博物館』中巻「日本の学校文化」 『教育博物館』下巻「日本の生活文化」 『教育博物館』解説	
1984 (59)	72		『図説教育人物事典』上中下	

4. 実物を通しての開拓的教育史研究への決断

唐澤が信条とした教育学研究は、「根本資料にとりくみながら単なる実証を越えて教育の精神に迫ろうとすること、学ぶことを通しての過去、現在の人間的ふれあいを大切にすること」⁽²⁾であった。

このような教育学研究の信条が、唐澤を実物研究へと向かわせた根本的要因であったと考えられる。唐澤が「日本教育史の研究の方法上の問題で岐路に立ち、去就に迷っていた」⁽³⁾とき、元文部大臣天野貞祐先生のお宅を訪ね、応接間に「人は人 われは吾なり とにかくに わが行く道を われはゆく也」(西田幾多郎)という句が掲げられているのに出会った。当時の唐澤にとって「この言葉にまさる教えはなかった。帰路この言葉を何度も何度も口ずさんだのであるが、おかげで私は実物資料による新しい教育史の開拓への自信が猛然と湧き出たのであった。」⁽⁴⁾と述懐している。

この決断を契機として、昭和38年51歳の時に『世界の理想的人間像』を刊行したのを最後に、専ら書物一筋の文献研究をつづけてきた唐澤が、止むにやまれぬ覚悟と使命感をもって、実物を通しての開拓的教育史研究の道へと研究方法を転換させたのであった。

従来、教師の歴史は教育制度や教育政策面から研究されることが多かった。これに対して唐澤は、教師の生きた生活変遷史を、回顧録や自叙伝、文学作品等を活用して把握することに努めた。このような研究手法を用いたことは、唐澤の教育学研究の根本精神に由来している。すなわち、前述したように唐澤は、「根本資料にとりくみながら単なる実証を越えて教育の精神に迫ろうとすること、学ぶことを通しての過去、現在の人間的ふれあいを大切にすること」を真情としていたからである。

筆者が大学2年生の時に唐澤富太郎に師事し、教育博物館に通うようになってから最初の仕事は、幅約5メートル、高さ7段もある特製の大きな本棚、10列に収められた書物を整理し、雑巾がけすることであった。この時に手にした書物が、近代日本教育史研究の3部作や世界の教科書研究の3部作の執筆において活用された資料や参考文献であった。1冊の本を書き上げるために、唐澤がこんなにもたくさんさんの書物を読み込んでいることに感動し、畏敬の念を抱かずにはおれなかった。

5. 『教師の歴史』に引用された主な回想録、自叙伝、文学作品、学校沿革史

さて、『教師の歴史』に引用された主な回想録、自叙伝、文学作品、学校沿革史を抽出すると次のようなものがある。

表2. 教師の生活と倫理を解明するために唐澤が活用した主な文献資料

4	1 回 想 録	沢柳政太郎『我が国の教育』、伊東駒吉『回顧七十有五年』、乙竹岩造『江戸の寺子屋』、坪井玄道「創立時代の師範教育」『教育五十年史』、『山路愛山講演集』、大瀬甚太郎「回顧六十年」『教育』第三卷、西村茂樹『往事録』、樋口長市「予の教員生活と教育上の些細な仕事」『教育』第三卷、下高井郡教育会『教育五十年を語る』、広島師範『六十年回顧録』、加藤友之助談『福師創立六十年』、明治13年3月東京教育会雑誌『大東重善先生』、野口援太郎「師範教育の変遷」『教育五十年史』、回顧録による『千葉師範学校沿革史』、森有礼を批判した嘉納治五郎『師範教育史資料』、藤原喜代蔵『明治教育思想史』、福井師範学校明治39年卒業生小辻宇太郎回顧談『六十周年記念誌』、星常子『名媛の学生時代』、毎日新聞埼玉版『埼玉教育回顧』、波頭夕子『女性教師は訴える』
---	------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2 自叙伝	『高島米峰自叙伝』、若槻礼次郎『古風庵回顧』、『守屋喜七自叙伝』、長谷川如是閑『ある心の自叙伝』、石井柏亭『柏亭自伝』、信濃教育会編『教育功勞者列伝』、山崎延吉『我農生回顧録』、春山作樹「記憶に残った明治教育」『教育』三巻、『江木千之翁経歴談』、伊沢修二『楽石自伝 教界周遊前記』、鳩山春子『我が自叙伝』
3 文学作品	井原西鶴『西鶴織留』巻一、江村北海『授業編』、式亭三馬『浮世風呂』、国木田独歩『酒中日記』、徳富猪一郎「小学校教員問題」『北海道教育雑誌』、石川啄木『林中日記』、島崎藤村『破戒』、田山花袋『田舎教師』、安部磯雄『婦人の理想』、上田庄三郎『青年教師の書』、添田知道『小説教育者』、村田豊二『一茎百華—永遠の教育者—』、夏目漱石『坊ちゃん』、杉本栄一『日本のペスタロッツチ足田校長』
4 地方史・学校沿革史	『福島県教育史』、『東京高等師範学校沿革史』、東京文理科大学・東京高等師範学校『創立六十年』、『松代学校沿革史』、『北海道教育雑誌』第106号、『城東教育六十年』、『新発田町教育史』、『長野県東筑摩郡誌』、『御影師範創立五十周年記念誌』、『兵庫県御影師範学校創立六十周年記念誌』、『神奈川県教育会五十年史』、『神奈川県師範学校『創立記念誌』、福岡県福岡師範学校『創立五十周年記念』、『京都師範学校沿革史』、『北海道札幌師範学校五十年誌』、下高井郡教育会『教育五十年を語る』、『宮城師範学校沿革史』、広島師範学校『六十年回顧録』、秋田師範学校『創立六十年』、石川県師範学校同窓会『石川県師範教育史』、『熊本県教育史』、青森県女子師範学校、青森高等女学校『創立三十周年』、愛媛県女師白揚会愛媛女師桜会『創立二十周年記念号』、『石川県師範教育史』

6. 教師の生活変遷史

上述の豊富な資料を駆使して、唐澤は教師の歴史をその生活と倫理に着目して詳述した。その概要を13期に分けて紹介したものが表3.である。

表3. 唐澤が13期に分けた教師の生活変遷史

1	<p>寺子屋の師匠</p> <p>「寺子屋の師匠は、封建社会を支配した儒教倫理のもとに厳然たる地位を保ち、「七尺下がって師の影をふむ可からず」(『童子教』)という中世以来高唱された師弟道徳を絶対倫理とする教育社会の教師として、また世の指導者階級として、自ら持すること極めて高く、なお世人の尊敬も厚かった。この教師像が永く明治中期に至るまで伝統的にうけつがれて、いわゆる天職的教師観を形成しているのである。」⁽⁵⁾</p>
2	<p>師匠より教員へ</p> <p>「寺子屋から近代学校へ展開するや、従来の個別的な教授法から一斉教授法へ一転し、また単純な手習い中心のカリキュラムから近代的教科内容のカリキュラムへと著しい発展をなしたので、教師もまたこれらの近代的教育技術をわきまえる必要を生じ、ここに新しく要求されたのが師範学校である。」⁽⁶⁾</p> <p>師範学校の出現によって、寺子屋師匠に終止符が打たれ、新しく教員が誕生することになった。明治前期の教員は出身階級が武士であるものが多く、寺子屋師匠の延長として威厳をもち、社会人からは尊敬されると同時に生徒に対しては極めて厳しかった。</p>
3	<p>士族的教師像—士魂と師魂—</p> <p>「明治前期の教師の性格について特に強調しなければならぬ点は、この時代の教員には武士的な気骨の教員が多かったということである。すなわち明治前期の教師は経済的には恵まれていなかったが、しかし中々屈せず意気盛んなものがあり、国士肌であり、武士気質をもち、師魂は士魂に通じていた。」⁽⁷⁾</p> <p>明治時代になり世禄を失った士族及びその子弟は、近代社会に新方途を求める理想は、先ず官員となることであった。それと並んで彼等が求めた道は教員になることであった。また、師範学校の教員も断然士族出身者が多かった。</p>

4	<p>政治的に圧迫された教員</p> <p>教師を最も強く制約したものは明治13年の集会条例であり、また明治14年の「小学校教員心得」であり、「学校教員品行検定規則」であった。これらの制約が加えられるに至った背景には、文明開化の波に乗って著しく自由民権運動がくり広げられたことがあげられる。そして教育界においても明治12年に自由教育令が公布されたのであるが、このような傾向は日本の天皇制絶対主義を動揺させるものであるとして、明治政府は明治13年には一転して改正教育令を出し、前年の自由教育令を廃止し、これとは反対に干渉的強迫的に上からの圧力によって勸学主義を徹底したのである。「また明治14年に「小学校教則綱領」を定め、ここでは従来小学校の教科目中最下位に置かれていた修身を改めて最上位におき、ここに修身が反動的教育の中心となるに至ったのである。」⁽⁸⁾</p>
5	<p>師範タイプの形成—森有礼の師範学校令と教師像の確立—</p> <p>明治18年にわが国最初の文部大臣となった森有礼は、国家発展の基礎は師範教育にあると確信し、この師範教育の改革のために明治19年に師範学校令を公布した。「師範学校令以後、師範生の学費はことごとく公費ということになり、食料、被服、学用品が皆な県費で支給され、被服は上衣はもとより下衣、帽子、靴、靴下に至るまで給せられた。また学用品も教科書は貸与され、筆、墨、鉛筆、ペン軸、ペン先、和洋罫紙類が毎週与えられた上、なお一週間手当として十銭ずつ給与された。」⁽⁹⁾</p> <p>森の師範教育の三綱領は師範学校令第一条に、順良、信愛、威重ノ特性ヲ涵養スルコトヲ努ムベシ、として掲げられたのである。彼は、知識学科よりも人物養成に力を入れた。そしてこのような人物中心の立場から師範生の入学には推薦制度を採用し、また学科課程には毎週6時間の兵式体操を入れて、これによって国家主義的精神の鼓吹をはかった。また、全寮制度をとりいれてその教育を徹底的な軍隊式教育とする大改革を断行した。」⁽¹⁰⁾</p>
6	<p>森有礼の師範教育に対する嘉納治五郎の批判</p> <p>明治26(1893)年に東京高等師範学校長となり、以後30年間師範教育に尽力した嘉納治五郎は、昭和6(1931)年に森を痛烈に批判して次のように述べている。</p> <p>「森が順良・信愛・威重の三綱領を標榜したということは、これによって教育が機械になることを示している。仏帽という兵隊帽をかぶせ、生徒を兵隊にしているのであるが、兵隊の場合には頭はなくとも一命のもとに多勢を動かす為に専制的にやらねばならぬ。しかるにこれを教育の中にとり入れることはとんでもない間違いである。学問する人間は心理学とか教育学とか哲学など何でもやるべきであって、精神を内に作っておいて自分自身に威厳を保つことが必要である。すなわち心のもち方から自然に現れた威厳でなければならぬ。また心の中からの信愛なら良いが、森の行き方は内面からの精神教育をしないで、軍人の如くに型にはめている。そこに魂が入って居らない理由がある。」⁽¹¹⁾ (加藤仁平『師範教育史資料』名家談叢)</p>
7	<p>師範タイプの内容</p> <p>「一般に師範タイプといえは着実性、真面目、親切などがその長所として評価される反面、内向性、裏表のあること、すなわち偽善的であり、仮面をかぶった聖人的な性格をもっていること、またそれと関連して卑屈であり、融通性のきかないということなどが世の批判を浴びてきたのである。」⁽¹²⁾</p> <p>森の師範教育の精神は、明治後期以後も一貫して生き続け、形式化されつつも国家主義、軍国主義思想の基盤となり、ナショナリズム、ミリタリズムの教育への道を開くことになるのである。</p>
8	<p>士族階級より農民階層へ</p> <p>日清戦争(明治27(1894)年)以後、明治30年代の教員の重要な変貌の一つは、教員の出身階級が、次第に武士階級から農民階層へと移り変わっていったことである。明治前期においては、教員ならびに師範学校入学者に士族が多くを占めていた。しかし、この傾向が明治30年代になると次第に士族出身より平民(特に農民)へと移行していったのである。30年代になると士族で師範学校に入るものは、よくよくの貧乏のものに限られ、優秀な士族は自己の子弟を中学校、高等学校、大学へと進学させていった。このように師範学校の入学者は農民階層に移行したことによって、社会の師範学校や教員に対する見方が低下することになった。</p>
9	<p>明治時代の理想の教師</p> <p>唐澤は、信濃教育会編『教育功労者列伝』(昭和10年発行)に掲載された初等教育に功労のあったもの、及び初等教育における教師の範とされ得る人物として取り上げられた44人の徳目を抽出して、次のように整理している。</p> <p>「職務に精励であること」(27人)、「教育熱心」(26人)、「教育研究に努力していること」(23人)、「学校経営能力のあること」(19人)、「誠実であること」(19人)、「慈愛すなわち教育愛を所有していること」(18人)、「細心綿密であること」(18人)、「修養に努力していること」(17人)、「多趣味であること」(17人)、「信念、気概を持っていること」(17人)、「卓見、見識をもっていること」(16人)、「忠義の念の厚いこと」(15人)、「研究心に富んでいること」(15人)、「学習指導法の改善などに貢献したこと」(15人)以下略⁽¹³⁾</p>

6

10	<p>女教員の登場と教員全般の職業人化 大正期に入って、女教員の著しい進出を見るに至ったことは、教師像の変遷史上極めて重要なことであつた。大正期に女教員が職業婦人的性格を濃厚にして、急速に進出してきたのと同様に、この期において教師全般が職業人化したことは極めて注目すべきことである。「この期に教師は、従来の天職、聖職的観念を放棄して急激に職業人化するに至った原因として、当時の教員の経済生活に着目することが重要である。経済が教師に影響する面は極めて大きい。教師の社会的地位の低下、天職的教師観より職業的教師観への変遷、さらには教育労働者の教職観への変遷などは、いずれも経済と深く関わっている。」⁽¹⁴⁾</p>
11	<p>昭和初期の不況と教員の受難 昭和の不況時代になると、農村の疲弊に影響されて教師の生活は一層転落し、受難時代が始まった。すなわち、「教員減俸、俸給寄付の要求、高級教員忌避、初任給減額、教員俸給不払、教員に町村税増課などの声が高まり、かつ実行され、その結果多数の教員の退職、特に高級教員の引退となり、昭和5年度には初任給の減額実現となつた。」⁽¹⁵⁾ このような状態にあつた昭和5年に、教育労働組合が誕生した。赤化教員は厳しく検挙され、留置場生活を送つたのであるが、「転向の第一の理由は、肉親特に両親の嘆きは何よりも彼らの胸を打つたということである。当時赤化思想といえば、一般世人は恰も鬼か蛇かの如く恐れ嫌つたのであるから、家族の一員にかかる人間を出せば、世間の非難、攻撃はすさまじく、両親の心痛を察するとき、転向を期せずには居られなかつたものと思われる。」⁽¹⁶⁾</p>
12	<p>政治的・軍事的権力下の教師 教師の経済的逼迫、及びそれから発生した教員の反抗運動としての赤化思想問題が起つたが、徹底して検挙され、転向を余儀なくされた。その後教師はいかなる運命をたどらねばならなかつたのであろうか。昭和16年に太平洋戦争に突入するや、教育は全く軍隊の手に掌握され、教育の暗黒時代がはじまつた。小学校が国民学校に改められ、儀式・学校行事を重視し、錬成とか行、あるいは団体訓練を強調した。すべて率先垂範をモットーとしなければならなかつた教師が、これらの先頭に立つて奮闘したことは言うまでもない。「教師は「背広の軍人」という性格をもって、軍人精神即教育精神となして行動するに至つた。すなわち政府、軍隊よりの上意下達を忠実に守つて縦の連絡を強くし、ナショナルイズム、ミリタリズムを民間に普及し、軍民両者の間にあつて、絶えずその離間を防ぐカスガイとなつて、帝国主義、軍国主義の培養につとめる役割を果たしたのである。」⁽¹⁷⁾</p>
13	<p>戦後の教師 終戦とともにすべては御破算となり、教師や国民の上のしかかつていた軍の圧力は完全に消滅し、政府の圧力も極度に薄くなつた。「戦後の教師像の特色として、何とせよ特筆しなければならぬことは、教師の団結ということであり、その力が未だかつてなかつたほどの偉大な力を発揮してきたということである。恐らくこのことは、日本の教師の歴史上特筆すべきことであろう。戦後、教師もまた人間である、否、教師は教育労働者であると公然と主張することが出来るようになり、次第に組合運動が展開された。」⁽¹⁸⁾</p>

7. 唐澤が考える教職の専門性とめざす東洋的伝統に立つ人格主義の教師像

(1) 教職の専門性に裏付けられた教師の社会的地位の向上

教師の社会的地位の評価は、その職業がどの程度の専門性をもっているか、によって決定される。しかし、日本の教師の社会的地位の評価は、教職の専門性においてではなく、専ら教師の人格性においてなされてきた。教育における教師の人格性が極めて重要なことは論を待たないが、近代学校の教師には、教職における専門性を具備していることが求められる。では、唐澤は教職の専門性についてどのように考察しているであろうか。

「一般に教職の専門性は、教師が教育実践に当たるときに必要とされる専門性であつて、①教材の選択の専門性、②教材体系化の専門性—教材と子どもとの統一を考へて、教材を体系的に組織すること。③学校・学級集団の指導の専門性—これは児童の個々の主体的成長と社会連帯性との統一である。④教育方法上の専門性—この中には、子どもの表現をよみとり、指導するというような、児童の経験の把握という技術もこれに属する。

これらの教育の専門性は、結局は教育実践の中にあるものであるから、専門性をより深めていくため

には、教育学によって教育実践の過程が一層明らかにされ、それによって、教育実践に必要と考えられる教職の専門性が具体的に示し得るのである。教師の社会的地位の向上には、一つには、こうした教職の専門性がより高められて行くことが必要なのであって、そのためには、教育学の果たすべき役割も少なくない訳である。」⁽¹⁹⁾

(2) 東洋的伝統に立つ人格主義の教師像

日本の教師の系譜は、仏教や儒教などの東洋思想に根ざしたものであり、唐澤はその特色を一語で「人格主義」と表現している。人格主義教育の問題点としては、教師と弟子との人間的ふれあいを根本に据えるので、前近代的な共同社会的人間関係が予想されること。また、教師の人格的影響力を重視する点で、前近代的な教師中心主義の形態をとることが予想されるので、人格主義的教育をそのままの形で今日の教育の中に再現することは時代錯誤的な誤謬を犯すことになる、と唐澤は警鐘をならしている。にもかかわらず、唐澤が人格主義教育の重要性を主張する理由を次のように述べている。

「人格主義には、教師として当然要求されるべき普遍的な要素を多分に含んでいることを忘れてはならない。すなわち、人格主義の基調たる人間尊重の精神があつて、それが教育愛となって無限の教育実践の源泉となっているのである。人格主義的教育は、教育の根本義に根ざした重要な一面を有している以上、これが何らかの形で今日の教育の中に生かされて来なければならないと思われるのである。とりわけ、教師の理想像を考えるにあたっては、これが教師の教育精神となって人格の中心に据えられなければならないものであると思われるのである。」⁽²⁰⁾ このような人格主義教育を実践した人物として、唐澤は山崎兵蔵と疋田浩四郎を上げている。

(3) 東洋のペスタロッチー、富山県西砺波郡刀利小学校の山崎兵蔵(1887-1963)

社会構造がいかに変化しようとも、教師の第一の本質は、児童生徒への教育的愛情であるといえよう。唐澤が村田豊二著『一茎百華—永遠の教育者—』(昭和28年)を通して出会ったのが山崎兵蔵であった。「まことに感無量、いくたびか感謝の涙にむせびながら反復読まざるを得なかった。」⁽²¹⁾ という。そして、「山崎の遺跡を尋ね、その実家にも訪れ多くの資料を得、これをNHKのテレビ放送でも放映した。」⁽²²⁾

「山崎氏は、妻なく子なく家もなく、専ら学校を家となし、村人を家族となし、児童生徒をわが子となし孫となし、刀利の山河をわが家となして暮らしたのであり、その親心には肉親を越えた真実の教育愛があった。同氏の念頭には結婚などは無かった。」と紹介している。⁽²³⁾

(4) 東京都西多摩郡戸倉小学校の疋田浩四郎校長(1850-1896) —師魂は士魂—

8 これからの教師は単に一つの学校の教師であるというだけでなく、同時にその地域社会の教師であることが求められている。このような地域社会の教育に身を傾け、自己を犠牲にして十余年間、貧苦の生活と闘い、遂に全村を感化した教育者として、唐澤は疋田浩四郎校長を取り上げている。疋田は播州出身の士族であったが、明治17年に転任して戸倉小学校長となった。「学校には地図もなければ、歴史の掛図一つない。またボロボロの学校は、日本中のどこにもない。同氏は春が来ても冬が来てもドテラと破れた小倉の袴を身につけ、これが同氏の唯一の身代であった。」という具合であった。⁽²⁴⁾

明治29年、同氏は48歳で他界するに至った。同氏の墓には全国から参拝するものが絶えず、多くの教師に偉大な感化を及ぼしたのである。唐澤は「過ぐる秋この墓に詣で、この土地の故老にこの話を聞いて胸つまる感を禁じ得なかった。」⁽²⁵⁾ と述懐している。この2つの事例は封建的な農村での実践であり、そのままの形で現代において実現できるものではない。しかし、それにもかかわらず、我々は教師

の人格主義教育に秘められている深い教育的愛情に学ぶことが多いといえるのではなからうか。

8. 『教育博物館』に唐澤が掲載した教育者、学者等の直筆の「書」、「書簡」

唐澤は、教育学とは「人間に関する学問であるから、できるだけ広く深い人間的なものに対する教養が必要」であり、「私は教育学ほど面白いものはないと心から信じております。」⁽²⁶⁾と述べている。そして、教育者の人間像に具体的に迫るために、以下のような教育者、学者等の直筆の書や書簡を収集して『教育博物館』中巻と下巻に掲載した。これだけの名だたる人物の書を幅広く収集したというところに、唐澤の実物研究にかける思いが並々ならぬものであったことが窺われるといえよう。

(1) 中巻. II. 近世の学問と思想

林 羅山の書	貝原益軒の肖像・書	柴野栗山の書2点	尾藤二洲の肖像・書
藤田東湖の肖像・書	江村北海の書	菅茶山の書	中江藤樹の書
大原幽学の書	熊沢蕃山の書	安積良斎の書	伊藤仁斎の書
伊藤東涯の書	伊藤東所の書	伊藤蘭岨の書	荻生徂徠の書
太宰春台の書	亀井南冥の書	皆川淇園の書3点	遠藤亮規の書
手島堵庵の書	大塩中斎の書	佐久間象山の書簡	大槻盤溪の書
佐藤一斎の肖像・書(78歳)・書(86歳)		古賀精里の肖像・書3点	
細井平洲の肖像・画並びに賛		亀田鵬斎の肖像・書(72歳)	
太田錦城・亀田鵬斎の賛・大西椿年画		広瀬旭荘の画並びに賛	

中巻. V. 近代日本の教育家たち—その筆跡にみる人間像の一側面—

教育者・学者	高嶺秀夫の書簡	杉浦重剛の書簡	福澤諭吉の書	西 周の書
	高田早苗の書	橋田邦彦の書	手島精一の書簡	東久世通禧の書
	近藤真琴の書簡	嘉納治五郎の書	井上円了の書	
	中村正直の書2点・書簡		伊沢修二の肖像・書簡2点	
	沢柳政太郎の肖像・書・書簡		成瀬仁蔵の書3点	
	元田永孚の肖像・書簡		西村茂樹の書簡2点	

教育行政家	大木喬任の書	芳川顕正の書	中橋徳五郎の書簡
	岡田良平の書簡	江木千之の書・書簡	
	田中不二麿の肖像・書簡		
	森有礼の書簡・筆跡2点		

女性教育家

跡見花蹊の肖像・書	吉岡弥生の肖像・書簡	下田歌子の肖像・書	棚橋絢子の書
-----------	------------	-----------	--------

(2) 下巻. X. 書く—その哲学と美学

宗教家・哲学者の書

良寛の書3点	西田幾多郎の書	鈴木大拙の書2点	久松真一の書2点
--------	---------	----------	----------

江戸 儒学 者	亀田鵬斎の書2点	佐藤一斎の書88歳	柴野栗山の書	細井平洲の書
	皆川淇園の書2点	伊藤東涯の書	伊藤蘭嶼の書	広瀬旭荘の書
	菅茶山の書2点	古賀精里の書2点		

近代 指 導 者	元田永孚の書	中村正直の書2点	西郷南洲の書	山岡鉄舟の書2点
	勝海舟の書	高橋泥舟の書	近藤真琴の書	三条実美の書
	有栖川熾仁親王の書			

明治時代女流の書

跡見花蹊の書3点	税所敦子の書2点	下田歌子の書	棚橋絢子の書
----------	----------	--------	--------

9. 教育者の「書」「書簡」を通して唐澤富太郎が看取した人間像の一側面

“書は人なり”といわれるように、「書」にその教育者の人格があらわれ、逆に「書」によって人間が形成される。このような観点から唐澤は、教育者の手になる実物の「書」や「書簡」を収集して座右に置き、その解読を通して人間像にふれ、その教育精神に迫ることをこの上ない喜びとしていた。このことについて唐澤は、次のように述べている。

「いったい近代学校創設以来、その定着をみるまでには、数多くの教育の推進者、指導者たちがいた。そうした人たちの公的私的の書簡、あるいは大書した軸や額などを通して、近代日本の指導者は果たしてどのような人物であったかを知ろうとするものである。

これは私個人の直観的・主観的な把握であり、異論もあろうかと思うが、古来“書は人なり”といわれるように、書にはその人の全人格を表出するものさえあり、どれ一つをとってみてもその人の片鱗を確かにうかがわせるものがある。また、その揮毫した句は、端的にその人の持ち味を浮かび上がらせているのであって、これによって私は、人物による教育史の一側面を伺い知ることができるように思った。」⁽²⁷⁾

(1) 福沢諭吉の「書」と人間像

「福沢の書は勢いのある字であり、闊達自在流麗円転で太い字、細かい字があり、渋滞がなく、書きたいように気分に応じて書いており、覇気に富んでいる。ここに福沢の心のスケールの大きさがよく示されているといえよう。この「書」はかなりのスピード感がある。またこの「書」は“自由人”“気概のある人間”としての彼の面を偲ばせるに十分なものがある。」⁽²⁸⁾

10

(2) 森有礼の「書」と人間像

「森有礼の書は、流麗達筆であり、人間が躍動している個性派の書であるといえよう。文字の技巧もうまいし、そこに豊かな才能を思わせるものがある。しかも画数を全部書いて略したところがなく、分かり易いところがあるのは、ペン書きの影響からきているものといえよう。いわば近代の書の一つの極点ともいえるであろう。この書は全体的に精神的な感じを与えており、その点、福沢諭吉の書に近いところがある。自己の所信に忠実に書いており、意志の強さ、覇気のある書体といえるであろう。」⁽²⁹⁾

(3) 嘉納治五郎の「書」と人間像

「この書自身がここに書かれている“精力善用”的な書風を示していると言えるであろう。一字一字の墨の濃さが万べんなく行きわたっており、太さも安定したものであり、字が大きくなったり小さくなったり、濃くなったり薄くなったりすることがない。無理とか無駄とか、むきになるというような感じは全然無いし、いささかも自分の気持ちによって走っていくのではなく、きちんと枠に入れていながら、枠にとらわれるところがない。

一見活字のような字をためらわずに書いているが、小さな技巧にとらわれることなく、ありのままに真面目に書いており、人間の素朴さを表現しているし、少しも動かない、崩しもしない正々堂々の字とすることができるであろう。」⁽³⁰⁾

(4) 貝原益軒の「書」と人間像

「この益軒の書は、落ち着いた字であって、気負ったところがなく流暢である。息の長い長命の相が、この書の中にも感じ取られるのである。……益軒の人生観は悲観的ではなく、明るく、物事に対して肯定的である。彼は生きとし生けるものを肯定する人であり、市井の人として、庶民を相手に物をいうところがある。こういう意味で平凡ではあるがすばらしい点がある。」⁽³¹⁾

(5) 跡見女学校の創立者、跡見花蹊の「書」と人間像

「跡見花蹊の書は跡見流といわれるものであってどうどうとしており、その字には崩れというものはない。彼女の書こそは純粹の伝統派として夾雑物のない字といえよう。」⁽³²⁾

(6) 西田幾多郎の「書」と人間像

「この書には流暢さがあり、修養の上ででき上っているという感じがするものであり、良寛ばりの字である。しかしそこに氣象の強さがあらわれており、良寛のような枯れた感じというよりも、自己の強さを持っていることを示している。

西田の書には、その著書を読んで感じさせられると同様な命のリズムが感じさせられる。それは氏の講演とも通じるものである。氏は講演のときには演壇の上を動物園の虎のように、あちこちと動きながら哲学を説かれ、それはいわゆる「哲学する」という風貌と結びつくものがある。そこからはつきない泉から新しい水を汲みとるような趣が感じさせられるのである。」⁽³³⁾

10. まとめ

- (1) 唐澤富太郎が教育学研究の方法を、文献研究から実物研究へと転換した根本的要因は、文献研究による単なる実証を越えて、教育の精神に迫ること、研究を通して過去と現在の人間的ふれあいを大切にしようとしたところにあったと考えられる。
- (2) 唐澤富太郎は、教師の生活変遷史を実証的に解明するだけに留まらず、自身が考える新しい日本の教師像を具体的に提示した。すなわち、教職の専門性を教師の教育実践に即して考察するとともに、これからの我が国に求められる教師像を、東洋的伝統に立つ人格主義の教師像として提示した。
- (3) 唐澤富太郎は、教育学とは人間に関する学問であるから広く深い人間的なものに対する教養が必要であると述べている。このことを自ら実践した取り組みこそ、実物研究であったといわなければ

ならない。近現代の教育者の手に成る実物である「書」や「書簡」を入手し、それを座右に置き、その筆跡の解説を通して人間像にふれ、教育精神にまで迫ることを、唐澤はこの上ない喜びとしていた。

(4) 文献研究による『教師の歴史』と実物研究による『教育博物館』は、研究方法においては大きく異なっている。しかし、“もの”を通して人間の精神的側面である“こころ”に迫ろうとする教育学研究において、唐澤は文献研究の幅広い裾野の上に、“もの”を通してその意味や価値を洞察する眼力を養い、晩年に研究方法の質的転換を成し遂げた。唐澤が教育学研究において開拓した2つの研究方法は、相補的であり、極めて密接な関係にあったと考えられる。

謝辞

本稿は、筆者の70歳定年退職を記念する論文となった。平成26年の人文学部開設以来6年間、本研究論集があったおかげで恩師唐澤富太郎の師恩・学恩に報いる小論を執筆してることができた。査読者から厳しくも温かいご指摘をいただいたおかげで、何とかまとめることができた。擲筆するにあたり、お世話になった多くの教職員の皆様、そして、学生諸君、淑徳大学に衷心より感謝を捧げます。

【注・引用文献】

- 1) 唐澤富太郎(1970)『執念—私と教育資料の収集—』p.237、講談社
- 2) 『東京教育大学閉学記念誌—教育学部—』東京教育大学教育学部、昭和53年3月15日、p.45
- 3) 唐澤富太郎(1970)『執念—私と教育資料の収集—』p.1、講談社
- 4) 同上書
- 5) 唐澤富太郎(1955)『教師の歴史—教師と生活の倫理—』p.1、創文社
- 6) 同上書 p.9
- 7) 同上書 p.24
- 8) 同上書 p.38
- 9) 同上書 p.40
- 10) 同上書 pp.41-42
- 11) 同上書 pp.54-55
- 12) 同上書 p.55
- 13) 同上書 p.101
- 14) 同上書 p.139
- 15) 同上書 p.155
- 16) 同上書 p.183
- 17) 同上書 p.201
- 12 18) 同上書 p.209
- 19) 同上書 p.269
- 20) 同上書 pp.272-273
- 21) 同上書 p.226
- 22) 唐澤富太郎(1984)「山崎兵蔵」『図説教育人物事典』中、pp.79-90、ぎょうせい
- 23) 唐澤富太郎(1955)『教師の歴史—教師と生活の倫理—』p.226、創文社
- 24) 同上書 p.254
- 25) 同上書 p.259 注、唐澤富太郎「疋田浩四郎—師魂は士魂—」(『図説教育人物事典』中、pp.35-39、ぎょうせい)

- 26) 唐澤富太郎(1970)『執念—私と教育資料の収集—』、p.255、講談社
- 27) 唐澤富太郎(1977)『教育博物館』中巻、p.11
- 28) 同上書 解説、p.403
- 29) 同上書 解説、p.423
- 30) 同上書 解説、pp.409-410
- 31) 同上書 解説 p.250
- 32) 同上書 解説 p.674
- 33) 同上書 解説 pp.661-662